

# 楼上からみる香港

## ―古書店の変遷―

澤田裕子

### ●はじめに

一九四〇年代半ば、中国の政治的動乱を逃れて香港に移住した内地の知識人が書店や出版社を開業したことが、香港の書店・図書市場の始まりだといわれている。一九五〇～六〇年代、香港の書店・出版業界は創作、評論等の文化活動を行い、絶版になっていた内地の書籍を再版し、台湾の出版物を流通させた。これらの活動は香港の青年読者を引き付け、やがて彼らは著名な学者、作家、文化人、出版人等へと成長していった（参考文献①）。

東京都の半分の広さしかない土地を争うように細長いビルが林立する香港では、建物の上階ほど店舗賃料が安い。通りに面さない二階以上に开店する小規模書店は、楼上書店または二樓書店（二階書店）と呼ばれている。主に文学・

歴史・哲学分野の専門書を扱う二階書店は、日常の喧騒を離れた楼上から社会を啓蒙する独自の書店文化として引き継がれてきた（参考文献②）。二階書店には、総合書店と一線を画し、専門分野に特化した品揃えと割引価格で顧客を引き付ける独立書店や、絶版や出版部数の少ない古書を扱う二手書店（古書店）がある。本稿では、安くて豊富な商品市場が立ち、かつては最も書店が多いことでも知られた旺角の西洋菜通りにある古書店を紹介したい。

### ●新亜書店

一九六〇年代後期～七〇年代、読書習慣は知識人から一般にも広がり、大衆文化のひとつとして発展した。一方、中国は大躍進政策に行き詰まり、文化大革命を發動し、経済的、政治的混乱状態にあ

った。中国の教育は衰退し、伝統文化の断絶と西洋文明との隔絶により、香港が中国研究の窓口となるに至った。当時、中国語、英語を問わず、内地、台湾、マカオ、東南アジアから香港に古本が集まってきたという。

一九六八年に創業した新亜書店は、西洋菜通りの一六階に店を構える文学・歴史・哲学分野の古書店である（写真1）。店名は、店主の蘇廣哲氏の出身校、新亜書院（現香港中文大學新亜書院）に由来する。蘇氏によると、文化大革命が収束しつつあった頃、香港中文大學崇基學院の沈宣仁院長を通じてアメリカの財団が大量の古本を買い付け、自由な思想をもたらすために中国に送ることもあったという。また、交流のあった中国の作家から文革前に出版した著作を探すのを頼まれもした。文化大

革命によって多くの文学作品が破壊され、内地の作家たちは創作意欲を喪失したが、香港の書店が彼らを支えていたといえる。

一九八〇～九〇年代、香港経済の発展につれ、出版・小売り形態が多様化した。一九八八年には三聯書店、中華書局、商務印書館が合併し、香港最大の聯合出版集団となった。当初は廃品回収者から仕入れていたが、中国の学術界が新刊を出版するようになると古本資源は減少した。創業時から一九八〇年代にかけて一〇〇軒を超えた古書店は、インターネットの普及や店舗賃料の値上がりによって廃業し、現在はわずか一〇軒ほどになったという。また返還前、蘇氏は一九九二年から一五年間、カナダのトロントに移住し、懐郷書房という古書店を開いた。華人移住者に中国語書籍を提供しつつ、故郷を想いながら、海外メディアに記事を書いていた。その間も現在九〇歳を越える母上が書店を引き継ぎ、新亜書店の歴史は続いている。

### ●梅聲書舍

香港の大陸化が懸念された一九九七年の返還後も、独自の政治体制「一国二制度」の下、香港社

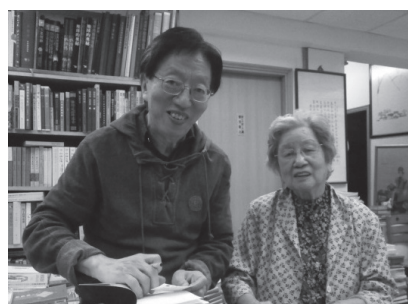


写真1：新亜書店の蘇廣哲氏と母上

る分野は扱わない。歴史・古代文学分野なら、その日売れなくても価値は普遍だという。魯迅と親交を結び、日中友好に尽力した日本の内山書店のような存在に

会の言論や報道の自由は基本的に維持された。二〇〇三年のSARS流行後、経済は落ち込み、旺角の二階書店の多くは廃業、移転していった。中国からの旅行者が増えるに従い、旺角は一流商業地として注目され、一階店舗はほぼ観光客向けに形を変えたといわれる。西洋菜通りの六階にある梅聲書舎は、会社勤めをしていた鄭廣文氏が友人とともに奮起して二〇〇五年に創業した(写真2)。店名は、二人が作詩填詞や書法を学んだ恩師、莫德光老師が自宅を梅聲小舎と呼んだのを懐かしんで付けた。大小の書画が店内の壁に飾られ、文学・歴史・哲学分野の古書店だとわかる。主な顧客は歴史・中国研究・文学分野の大学関係者だ。移住などの理由で古本を売りに来る客もいるが、フィクション・経済・法律・コンピュータサイエンス等、時とともに内容が古くなる分野は扱わない。

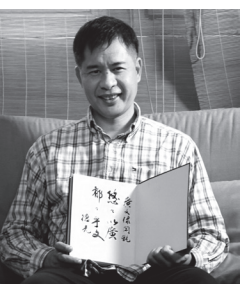


写真2：梅聲書舎の鄭廣文氏

主と折半することになっている。主な新刊書は文学・歴史・哲学・社会科学分野の中国・香港・台湾の出版物、および外国の出版物、翻訳書だ。香港の地域問題を扱う図書も揃えている。香港や海外の著名学者による座談会や読書会、新刊書の発表会を頻繁に開催し、出版物を介した序言書室の幅広いネットワークが、現代香港の文化・社会活動を促進している。

憧れると話された。恩師の書による荘子の教えはレジのすぐ上に飾られ、鄭氏の今日を導いている。

### ●序言書室

一九九〇年代生まれの同世代の多くも歴史に興味はあるが、慣れ親しんだ香港の姿を偉大なる中国を中心とした公式の歴史書に見出すことはできない。むしろ、図書館で保管しないような大衆新聞の新聞小説等に昔の香港の様子が詳しく描かれているという。一度出版された香港の文学書はめったに再版されないの、関心を寄せる一九五〇〜七〇年代の香港文学の原本を探すには古書店を回るしかない。週に一〜二回は新亜書店や精神書局、新聞が豊富な神州図書中心等を訪れている。彼女にとつて古書店は重要な研究資源であると同時に、生まれ育った香港の歴史を辿る場所でもある。

●古書に求める香港の歴史と文化  
香港中文大学で中国文学を研究する李微婷氏は、二〇〇二年に退官した盧璋鑾教授から古書や古書店の価値を教わった(写真4)。

### ●おわりに

③倉田徹・張或馨「香港——中国と向き合う自由都市」(岩波書店、二〇一五年)。

楼前から望む香港社会は様々な変化してきた。香港の人々が自らの立ち位置を探りつつ、前途を切り開いてきた歴史は書店の変遷にもみて取れる。伝統の書店文化が引き継がれていく一方、若い世代の香港の歴史と文化への関わり方に書店業界の新たな可能性が感じられる。(さわだ ゆうこ/アジア経済研究所 図書館)

### 《参考文献》



写真3：序言書室の李達寧氏



写真4：香港中文大学の李微婷氏